

特別企画：焼酎メーカー売上高ランキング（2018年）

売上高上位 10 社中 7 社が減収

～ 霧島酒造が 7 年連続でトップも、酒類消費の分散化で劣勢に～

はじめに

国税庁が発表した 2017 年度（平成 29 年度）の国内酒類消費量は、約 837 万 3600 キロリットルと、前年度比 0.5% 減少した。減少するのは 2 年連続。他方、ウイスキー（前年度比 10.5% 増）はハイボールブームにより、また、リキュール（同 6.1% 増）やスピリッツ（同 14.5% 増）は缶チューハイや缶カクテルなどの R T D（Ready to Drink）飲料市場の拡大により、それぞれ消費量や伸び率の増加が際立っている。

焼酎の消費量は約 81 万 6000 キロリットルと、依然として根強いファンを抱えているものの、ピークだった 2007 年度（100 万 4700 キロリットル）から 18.8% 減少している。酒類合計が 5 年前からさほど減少していないことを考慮すると、消費者の嗜好が多様化し、酒類消費が分散する傾向が見て取れる。

帝国データバンク福岡支店では、売上高に占める焼酎・泡盛の割合が 5 割以上となった酒類製造業者（焼酎・泡盛以外の事業で計上した売上高も含む）を『焼酎メーカー』と定義。企業概要ファイル「COSMOS 2」（約 147 万社収録）より、全国の焼酎メーカーの 2018 年（1 月期～12 月期）売上高をランキング形式により抽出し、上位 50 社の売上高や利益動向などについて集計した。なお、本調査は 2018 年 8 月に続く 16 回目。

調査結果（要旨）

1. 2018 年の売上高ランキングは、「黒霧島」で知られる霧島酒造（株）（宮崎県都城市）が 7 年連続でトップ。2 位は、「いいちこ」ブランドを主力とする三和酒類（株）（大分県宇佐市）。3 位にはオエノンホールディングス（株）の焼酎事業である「オエノングループ」が入った
2. 上位 50 社の売上高合計は 3140 億 3400 万円と、前年と比較して 2.4% 減少した。なお、「オエノングループ」の売上高を除外して 51 位の売上高を加算して計算した調整後の売上高合計は前年比 2.9% 減の 2747 億 700 万円と、2005 年以降の最少となった
3. 上位 50 社のうち「減収」企業は 28 社と、前年に続き半数を上回った。売上高規模別にみると、「10 億円未満」を除く全ての区分で減収企業の割合が半数を超えた
4. 税引き後当期純利益が判明した 41 社のうち、「赤字」企業は 7 社。
5. 都道府県別にみると、社数は「鹿児島県」が 21 社、売上高合計は「宮崎県」が 904 億 400 万円と、それぞれ最多

1. 売上高ランキング

1位 霧島酒造(株) 659億100万円（前年比3.4%減）

全国の焼酎メーカーの2018年（1月期～12月期）の売上高ランキングは、7年連続¹で霧島酒造（株）（宮崎県都城市）がトップとなった。「黒霧島」を主体に、ロングセラー「霧島」をリニューアルした「白霧島」、2018年から通年販売になった「赤霧島」などを展開している。2018年は発売20周年を迎えた「黒霧島」の魅力にさらに磨きをかけた「黒霧島EX」の販売をスタート。2016年7月より建設を進めていた志比田第二増設工場が竣工し稼動したものの、他飲料の競合に加え、九州以外での売り上げが伸び悩み、全体を押し下げた。

2位 三和酒類(株) 445億4800万円（前年比4.2%減）

7年連続で2位をキープ。「下町のナポレオン」の愛称で知られる「いいちこ」シリーズを主体に、地元大分県産の麦を使用した「西の星」ブランドを展開。関東・関西・中部などの大都市圏をはじめ、北米やアジアなど世界各国・地域に販路を構築している。2018年3月7日～4月3日に（株）ビームスとの共同イベント【いいちこ×BEAMS JAPAN】を開催し、コラボレーショングッズの販売やバーテンダーによるカクテルイベントなども実施して、関東エリアを中心に拡販を進めたが、減収を余儀なくされた。

3位 オエノングループ 401億3100万円（前年比1.3%増）

オエノンホールディングス（株）では、傘下の合同酒精（株）（東京都中央区）、福徳長酒類（株）（千葉県松戸市）、秋田県醗酵工業（株）（秋田県湯沢市）の3社で焼酎を製造しており、本調査では同3社の焼酎事業の売上高〔有価証券報告書記載のセグメント別アイテム（主要製品）別の販売実績〕を集計対象としている。2008年以降、連結売上高に占める焼酎の比率が5割を下回って集計対象外となっていたが、2017年からランキングに復帰した。

しそ焼酎「鍛高譚（たんだかたん）」をはじめ、本格焼酎「博多の華」シリーズ、北海道において大きなシェアを握る甲類焼酎「ビッグマン」シリーズなど多様なラインナップを展開しており、2018年についても売り上げを伸ばした。12月9日の「しそ焼酎 鍛高譚の日」に合わせて、北海道白糠町で収穫したばかりの赤シソだけを贅沢に使用した「鍛高譚プレミアム」を限定販売したことや、「鍛高譚」の売り上げの一部を北海道胆振東部地震の復興支援として寄付する取り組みを行ったこと、また、「博多の華」シリーズ、甲類乙類混和焼酎の「すごむぎ」「すごいも」が好調だったことも売り上げを伸ばす一因となった。

なお、トップ10の顔ぶれは前年と変わらないが、7社が減収となった。順位は、前年9位の高橋酒造（株）（熊本県人吉市）と同10位の本坊酒造（株）（鹿児島市）が入れ替わった。

¹ 2015年4月に旧・霧島酒造（株）は霧島ホールディングス（株）に商号を変更したうえで持ち株会社となり、新たに設立した霧島酒造（株）（2014年3月設立）が酒類製造部門を継承した。順位は旧・霧島酒造（株）からの通算。

2018年焼酎メーカー売上高ランキング 上位50社

(売上高は推定を含む)

順位	前年 順位	商号	所在地	主力ブランド(※は甲類)	主な原料	創業	設立	決算 月	売上高 (百万円)	前年比 売上高 伸び率
1	1	霧島酒造(株)	宮崎県都城市	黒霧島、白霧島、赤霧島、茜霧島	芋、麦	1916年	2014年3月	3	65,901	▲3.4%
2	2	三和酒類(株)	大分県宇佐市	いいちこ、西の星	麦	-	1958年9月	7	44,548	▲4.2%
3	3	オエングループ	東京都中央区	鍛高譚、博多の華、※ビッグマン	しそ、麦	-	-	12	40,131	1.3%
4	4	雲海酒造(株)	宮崎市	日向木挽、雲海、いいとち	芋、ソバ、麦	-	1967年11月	9	17,137	0.8%
5	5	二階堂酒造(有)	大分県日出町	大分むぎ焼酎二階堂、吉四六	麦	1866年	1964年12月	6	15,300	▲1.3%
6	6	瀬田酒造(株)	鹿児島県いちき串木野市	海童、薩摩富士、隠し蔵	芋、麦	1868年	1951年7月	6	12,902	▲3.0%
7	7	薩摩酒造(株)	鹿児島県枕崎市	さつま白波、黒白波、神の河	芋、麦	-	1936年6月	6	10,400	▲11.9%
8	8	若松酒造(株)	鹿児島県いちき串木野市	薩摩一、薩州麦、わか松	芋、麦	1719年	1953年9月	6	7,370	▲1.5%
9	10	本坊酒造(株)	鹿児島市	桜島、貴匠蔵、※宝星	芋、麦	1872年	1955年10月	6	6,951	1.1%
10	9	高橋酒造(株)	熊本県人吉市	白岳、白岳しろ	米	1900年	2001年11月	9	6,565	▲6.2%
11	11	美峰酒類(株)	群馬県高崎市	※司、上州むぎ焼酎	麦	1941年	2007年10月	9	5,366	▲3.6%
12	13	(株)宮崎本店	三重県四日市市	※キンミヤ焼酎	麦	1846年	1951年3月	9	5,299	11.1%
13	12	大口酒造(株)	鹿児島県伊佐市	伊佐錦、黒伊佐錦	芋	-	1970年8月	3	4,930	▲7.5%
14	14	鷹正宗(株)	福岡県久留米市	めちやうま、ばっかい、ごりよんさん	麦、芋、ソバ、米	-	1935年11月	12	4,307	0.7%
15	15	小正醸造(株)	鹿児島市	さつま小鶴、小鶴くろ	芋、麦	1883年	1953年7月	6	3,935	▲3.5%
16	16	神楽酒造(株)	宮崎県高千穂町	ひむかのくろうま、天孫降臨、天照	麦、ソバ、芋	-	1954年11月	9	3,733	▲5.9%
17	17	長島研醸(有)	鹿児島県長島町	さつま島美人	芋	-	1967年2月	9	3,082	▲8.9%
18	18	岩川醸造(株)	鹿児島県曾於市	おやっとなあ、ハイカラさんの焼酎	芋、麦	1870年	1922年11月	3	2,700	▲3.6%
18	21	三岳酒造(株)	鹿児島県屋久島町	三岳	芋	-	1949年11月	9	2,700	3.8%
20	19	札幌酒工業(株)	札幌市	※サッポロソフト、喜多里	芋	-	1933年10月	9	2,592	▲5.2%
21	22	老松酒造(株)	大分県日田市	閻魔、麴屋伝兵衛	麦、米	1789年	1973年12月	3	2,535	▲1.6%
22	23	(株)都城酒造	宮崎県都城市	あなひととめばね、みやこんじよ	芋、麦	-	1956年2月	8	2,518	1.3%
23	33	福井酒造(株)	愛知県豊橋市	※自遊自在、千年浪漫	酒粕	1912年	1948年10月	9	2,246	28.3%
24	26	新平酒造(株)	鹿児島県大崎町	大金の露、金計佐	麦、芋	1896年	1988年6月	6	2,200	4.8%
25	20	田苑酒造(株)	鹿児島県薩摩川内市	田苑	麦、芋	1890年	1976年6月	6	2,146	▲18.2%

2018年焼酎メーカー売上高ランキング 上位50社

順位	前年 順位	商号	所在地	主力ブランド(※は甲類)	主な原料	創業	設立	決算 月	売上高 (百万円)	前年比 売上高 伸び率
26	24	町田酒造(株)	鹿児島県龍郷町	里の囀	サトウキビ	-	1983年10月	3	2,131	▲7.0%
27	26	宗政酒造(株)	佐賀県有田町	のんのこ、黒泉山	麦、芋	-	1985年5月	8	2,114	0.7%
28	25	(株)久米島の久米仙	沖縄県久米島町	久米島の久米仙	米	1949年	1993年7月	12	2,042	▲6.3%
29	28	(株)奄美大島開運酒造	鹿児島県奄美市	れんと、紅さんご	サトウキビ	1954年	1998年2月	9	2,023	0.6%
30	29	(有)比嘉酒造	沖縄県読谷村	残波	米	1948年	1985年8月	2	1,920	▲4.0%
31	32	江井ヶ嶋酒造(株)	兵庫県明石市	※白玉焼酎、福寿天泉	麦	1679年	1888年10月	9	1,915	3.7%
32	30	ヤエガキ酒造(株)	兵庫県姫路市	あらし、※甲(カブト)	麦	1666年	1962年12月	9	1,842	▲4.3%
33	31	八鹿酒造(株)	大分県九重町	銀座のすずめ、なしか	麦	1864年	1949年11月	9	1,829	▲1.7%
34	34	小鹿酒造(株)	鹿児島県鹿屋市	小鹿	芋、麦	-	1971年8月	7	1,602	▲7.3%
35	35	玄海酒造(株)	長崎県杵岐市	むぎ焼酎杵岐、一支園いき	麦	1900年	1985年2月	4	1,569	▲1.2%
36	37	白金酒造(株)	鹿児島県始良市	白金乃露、石蔵	芋	1869年	1952年7月	6	1,450	▲0.7%
37	39	聖酒造(株)	群馬県渋川市	聖	芋、酒粕	1841年	2006年5月	9	1,400	4.1%
37	38	白玉醸造(株)	鹿児島県錦江町	魔王、白玉の露	芋	1904年	1953年2月	3	1,400	▲3.4%
39	-	(株)奄美大島にしかわ酒造	鹿児島県徳之島町	島のナポレオン	サトウキビ	-	1980年4月	9	1,366	5.2%
40	41	萬世酒造(株)	鹿児島県南さつま市	薩摩萬世、蔵多山	芋	1899年	1985年11月	6	1,359	7.0%
41	40	(資)光武酒造場	佐賀県鹿島市	魔界への誘い、舞ごころ	芋、麦	1688年	1955年10月	9	1,300	▲3.0%
42	41	佐藤酒造(有)	鹿児島県霧島市	佐藤、さつま	芋、麦	1906年	1952年4月	5	1,270	0.0%
43	43	さつま無双(株)	鹿児島市	さつま無双、くろはち	芋、麦	1966年	1970年10月	6	1,156	▲2.0%
44	44	高千穂酒造(株)	宮崎県高千穂町	高千穂、わかむぎ	麦、米、ソバ	1902年	1976年2月	3	1,120	0.4%
45	45	まさひろ酒造(株)	沖縄県糸満市	まさひろ、海人	米	1883年	1965年8月	8	1,100	0.0%
46	46	ハリオス酒造(株)	沖縄県名護市	くら、轟、琉球美人	米	-	1961年8月	12	1,050	5.0%
47	48	若潮酒造(株)	鹿児島県志布志市	さつま若潮、千亀女	芋、麦	-	1968年8月	7	950	5.6%
48	48	織月酒造(株)	熊本県人吉市	織月、川辺、峰の露	米	1903年	1950年9月	6	900	0.0%
49	50	(株)金龍	山形県酒田市	※爽、※爽金龍がおり	-	-	1950年4月	9	890	0.0%
50	51	香岐の蔵酒造(株)	長崎県杵岐市	香岐っ娘、香岐の島	麦	-	1984年5月	9	842	▲4.5%
参考 51	-	大海酒造(株)	鹿児島県鹿屋市	さつま大海、くじらのボトル	芋	-	1975年6月	6	804	▲8.6%

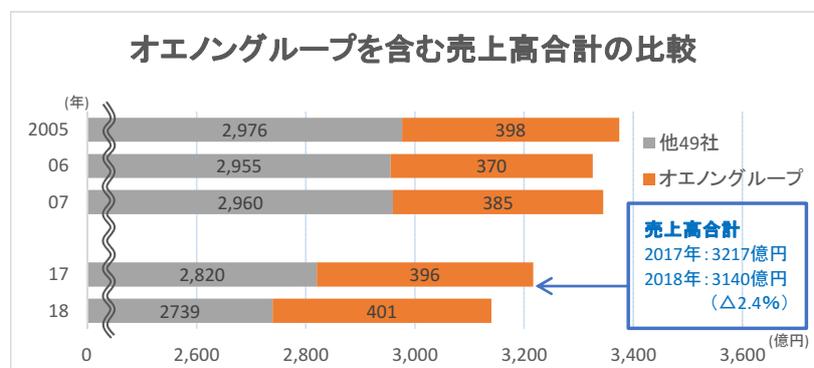
(売上高は推定を含む)

2. 売上高合計推移

2008年（2009年発表分）から2016年（2017年発表分）にかけて、オエノングループが集計対象外となっていた。このため、上位50社の売上高合計については、2009年（2010年発表分）の集計時に、2005年までさかのぼって同グループの売上高を除外し、かつ、51位企業の売上高を加算する調整を実施。以降、この調整後データを用いて売上高合計の推移をみてきたため、2018年は2016年以前との単純比較ができない。

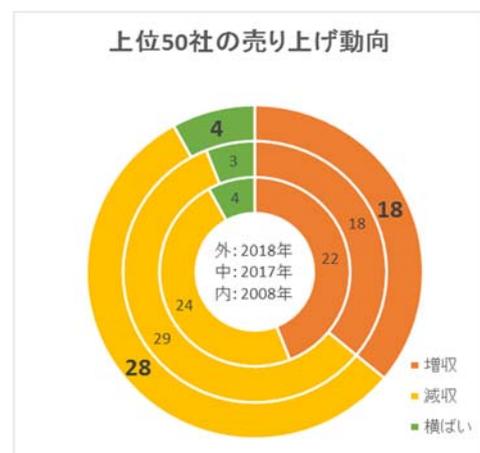
そこで、2018年についても、上記と同様の調整を行ったうえで売上高合計を比較すると、2018年の上位50社（調整後）の売上高合計は、前年比2.9%減の2747億700万円と、2年連続で減少した。ピーク時の2008年（3090億1300万円）から11.1%減少し、2005年以降の最少となった。全体としては、ワインやウイスキー、リキュール類との競合から苦戦が続いている。

なお、調整前の上位50社の売上高合計は3140億3400万円、前年（3216億5300万円）と比較すると2.4%の減少となった。



3. 売り上げ動向

「増収」企業が18社（前年18社）だったのに対し、「減収」が28社（同29社）にのびた。「横ばい」は4社（同3社）。依然として6割近くの焼酎メーカーが減収を余儀なくされており、焼酎ブームの収束と、その後のハイボールブームやRTD・低アルコール飲料の台頭などの影響を受けている様子がわかる。



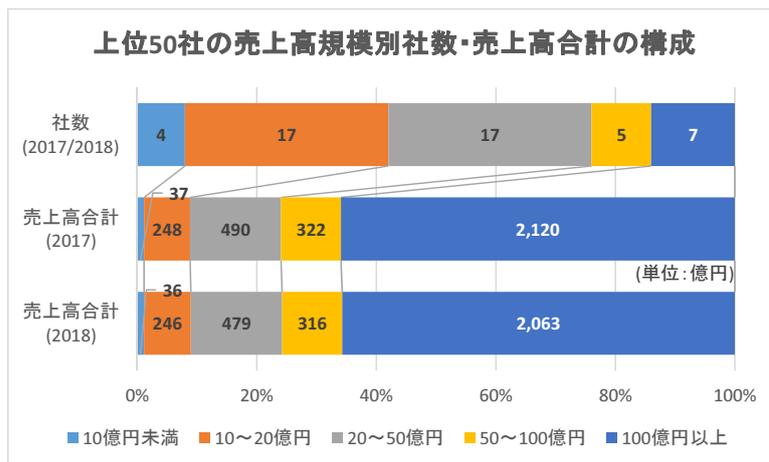
「減収」企業の増加は、売上高規模を問わない業界全体の課題となっている。売上高規模別にみると、「減収」企業割合が最も高かったのは「100億円以上」（7社中5社）で、「10億円未満」を除く全ての区分で5割を超えた。

また、売上高規模別に売上高合計の推移をみると、社数構成は前年と同じだが、全ての区分で売上高合計が減少していることが分かる。「10億円以上20億円未満」以外の4区分では減収幅が2%を上回っており、とりわけ、売上高合計の65.7%を占める「100億円以上」の減収幅は2.7%で最大となるなど、2018年は大規模メーカーの苦戦が浮き彫りとなった。

■ 上位50社の売上高規模別の売上動向

売上高規模	増収	減収	横ばい
10億円未満	1	1	2
10～20億円	6	9	2
20～50億円	7	10	0
50～100億円	2	3	0
100億円以上	2	5	0

上位50社の売上高規模別社数・売上高合計の構成



4. 利益の動向

税引き後当期純利益が判明した41社のうち、「赤字」企業は7社、構成比は17.1%にのぼった。この7社のうち、2年連続減収となった企業が4社を占めている。売上高が伸び悩むなか、「原材料や資材、運送費の値上がりを販売価格に転嫁できなかった点が共通項として浮上する。

2018年以降、人手不足にともなう運送費の値上がりが続いている。酒類は重量物であり、当面、焼酎メーカーの経営を圧迫する大きな要因となる公算が大きい。

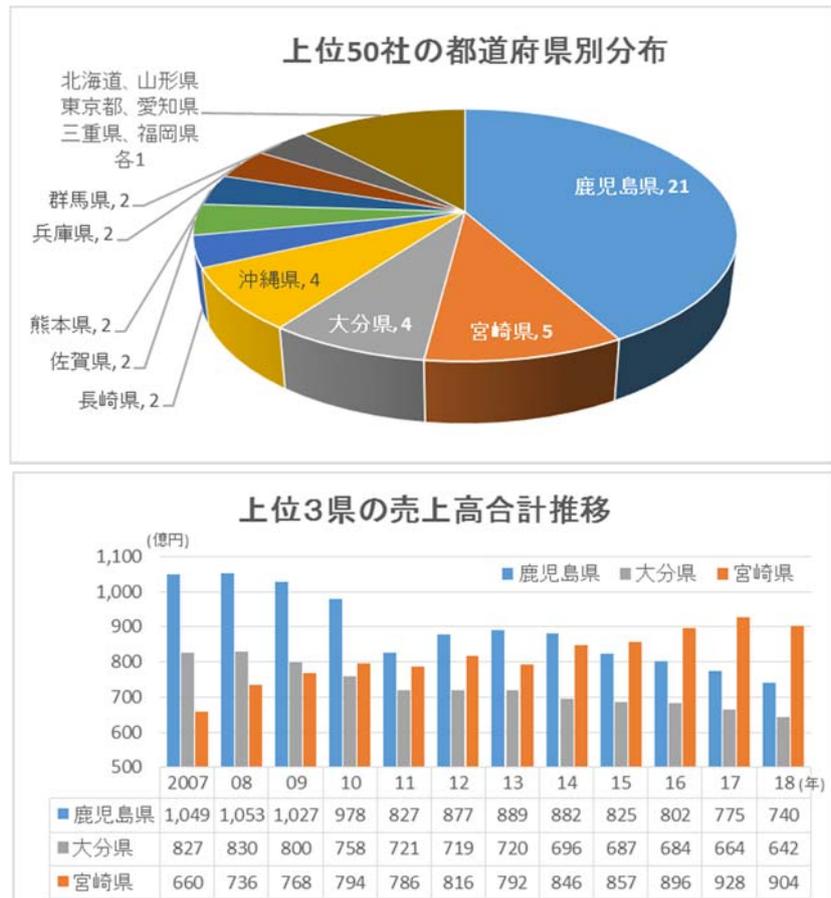
上位50社の利益動向



5. 都道府県別の分布

売上高上位 50 社を本社所在地別にみると、「鹿児島県」が 21 社で最多。「宮崎県」が 5 社、「大分県」と「沖縄県」がそれぞれ 4 社で続いた。これらの社数は前年と変動はない。

他方、都道府県別の売上高合計は、ランキングトップの霧島酒造（株）を含む「宮崎県」が 904 億 900 万円で最多だったものの、霧島酒造（株）の減収もあったことから前年比は 2.6% 減となった。「鹿児島県」は同 4.4% 減の 740 億 2300 万円。麦焼酎を主力とする「大分県」は同 3.3% 減の 642 億 1200 万円といずれも減収を余儀なくされた。



まとめ

2018年の焼酎メーカー売上高ランキングでは、霧島酒造（株）が7年連続で首位となった。同社の売上高は10年前の2008年（368億7200万円）と比べて1.79倍に伸びたものの、前年比では3.4%減となった。売上高上位10社中7社が減収となるなど、大手メーカーの苦戦が改めて浮き彫りとなり、業界にとって焼酎離れや消費者の嗜好の多様化が大きな脅威となっている。上位50社の売上高合計は10年前と比べて11.1%減少、前年と比べても2%以上減少した。

酒類業界全体をみても、人口減少や少子高齢化により飲酒率の高い年齢層が減少しているうえ、健康志向の高まりによる飲酒の敬遠といった問題も内包している。（株）日本政策金融公庫農林水産事業がまとめた「平成31年1月消費者動向調査」（2019年3月7日発表）によれば、消費者の現在の食の志向は「健康志向」（46.6%、2つまで回答、以下同）が過去最高をマークするほか、「経済性志向」（36.9%、「簡便化志向」（31.2%）も高まっていることが分かった。本調査で増収となった焼酎メーカーの傾向をみると、リキュール類の売り上げを伸ばしていたり、ディスカウントストアやドラッグストアで販売する紙パックやペットボトル商品の売り上げを伸ばしたケー

スなどが見受けられる。

こうしたなか、ランキング23位の福井酒造（株）（愛知県豊橋市、前年比28.3%増）、同12位の（株）宮崎本店（三重県四日市市、同11.1%増）など、甲類焼酎を主力としているメーカーの売上高伸び率が高位を示した点は注目に値する。清涼飲料大手のコカ・コーラシステムが九州限定で昨年5月に発売した缶入りレモンサワー「檸檬堂（れもんどう）」シリーズの全国発売を検討していることを明らかにしたように、新たなRTD飲料が続々と発売されるなか、消費者の嗜好が分散化しており、本格焼酎の市場が侵食されている。

本格焼酎メーカーは、国内市場向けの低アルコール焼酎に力を入れ始めている。雲海酒造（株）（宮崎市）は、癖のある香りや味わいより、飲みやすさを追究した「木挽きBLUE」にアルコール度数を抑えた商品（20度）をラインナップ。人気女優を起用したプロモーションで女性の需要を取り込んでいる。さらに、消費行動モデルが大きく変化するなか、特に若年層の需要を取り込むためには従来型の大衆広告ではなく、SNSを含むWebツールを駆使したプロモーションも欠かせなくなってきた。

業界浮沈のカギを握るのは、海外市場の取り込みだろう。輸出やインバウンド需要の取り込みといった観点では、日本酒（SAKE）にやや遅れを取っているが、今年2月に発効した日本と欧州連合（EU）による経済連携協定（EPA）では、決められた容量以外では流通・販売ができない規制が撤廃され、四合瓶や一升瓶での輸出が可能になるなどビジネスチャンスも生まれている。行政も巻き込んだ業界一丸となった取り組みが不可欠となってきた。

【内容に関する問い合わせ先】

株式会社帝国データバンク福岡支店情報部 担当：三好暁久／^{はやし} 農 智海
TEL：092-738-7779 FAX：092-738-8687

当レポートの著作権は株式会社帝国データバンクに帰属します。

当レポートはプレスリリース用資料として作成しております。報道目的以外の利用につきましては、著作権法の範囲内でご利用いただき、私的利用を超えた複製および転載を固く禁じます。